

## 『阿部青鞋俳句全集』読書会

2021年4月11日（日）zoomにて開催

榊原紘／衿草遠馬

阿部青鞋（あべせいあい）（1914年11月7日 - 1989年2月5日）

俳人。本名は麗正（よしまさ）。別号羽音（うおん）。

現在の東京都渋谷区に生まれる。新興俳句系の「句帖」、渡辺白泉らの同人誌「風」に参加。「螺旋」「動線」を創刊。1957年「花実」参加。1958年「俳句評論」参加。1959年受洗。1963年「瓶」（のち「壺」）創刊。「八幡船」参加。1969年永田耕衣の初期句集『真風』を編集発行。1974年「対流」参加。1983年第30回現代俳句協会賞受賞。

代表的な句に「かたつむり踏まれしのちは天の如し」「永遠はコンクリートを混ぜる音か」など。比喻に飛躍のあるユニークな句を多数作っている。（Wikipediaより）

### 〈年表〉

参考：現代俳句協会『昭和俳句作品年表』、村山古郷『大正俳壇史』、『昭和俳壇史』、『阿部青鞋俳句全集』

年号	青鞋	社会・生活・文化	俳句
1914年 （大正3年）	誕生	第一次世界大戦勃発／宝塚少女歌劇（現在の宝塚歌劇団）第1回公演。東京駅開業	新傾向について乙字と碧梧桐の隔たりが鮮明になる。井泉水の独自路線
1918年 （大正7年）	お寺の養子になる		
1927年（昭和2年）：金融恐慌 芥川龍之介の自殺（飯田蛇笏〈芥川龍之介氏の長逝を深悼す〉「たましひのたとへば秋のほたるかな」） 栗林一石路ら、プロレタリア俳句を発表し始める。秋櫻子の「連作」 1928年（昭和3年）：共産党「赤旗」創刊。初めての普通選挙。「破魔弓」から「馬酔木」に改題。4S誕生。 虚子の「花鳥諷詠」 1929年（昭和4年）：世界恐慌始まる。小林多喜二「蟹工船」。芝不器男夭逝。秋櫻子『葛飾』（虚子「たったあれだけのものかと思いました」） 1930年（昭和5年）：ロンドン海軍軍縮条約。エロ・グロ・ナンセンスの流行。波郷、五十崎古郷と出会う。 ABC（秋元不死男）の「プロレタリア俳句の理解」 1931年（昭和6年）：満州事変。秋櫻子のホトトギス離脱（→虚子の小説「厭な顔」） 1932年（昭和7年）：満州国建国宣言。五・一五事件、犬養毅首相暗殺。新興俳句運動起こる。ルビ俳句			
1933年 （昭和8年）	19歳。学園卒業。画家を目指し、渡仏を企てるが、叔父の急逝により断念	ヒトラーがドイツ首相に。日本、国際連盟を脱退	新興俳句、全国に伝播
1934年（昭和9年）：日野草城「ミヤコ・ホテル」。西東三鬼ら「新俳話会」。無季俳句容認論			
1936年 （昭和11年）	22歳。句誌『句帳』に参加	ロンドン軍縮会議脱退を通告。二・二六事件 ベルリン・オリンピック	無季新興俳句の成熟

1937 年 (昭和 12 年)	句誌『風』に参加。内田暮情とメカニズム俳句を提唱。『螺旋』、『動線』発行	文化勲章制定。日中戦争勃発 軍歌発表、愛国行進曲制定	戦争俳句が盛んに作られる。 碧梧桐死去(虚子「たとふれば独楽のはじける如くなり」)
1939 年(昭和 14 年):第二次世界大戦勃発。国内でヤミ取引横行。 中村草田男・加藤楸邨・石田波郷らが「人間探究派」と呼ばれるように			
1940 年 (昭和 15 年)	住谷栄子と結婚	「ぜいたくは敵だ」 優良多子家庭の表彰	第一次～第三次「京大俳句」 弾圧事件。思想統制激化
1941 年 (昭和 16 年)	『現代名俳句集』刊。応召。 戦病で召集解除	日本軍がハワイ真珠湾を攻撃、 太平洋戦争勃発 食糧事情悪化	四誌(「広場」「土上」「俳句生活」「日本俳句」から 13 名) 一斉俳句弾圧事件
1942 年 (昭和 17 年)	渡辺白泉・三橋敏雄らと 古俳諧の研究に没頭	東京初空襲 「結婚十訓」、「欲しがりません勝つまでは」	聖戦俳句
1944 年 (昭和 19 年)	その成果を『尺春庵集』に まとめる	サイパン島守備隊全滅、B29 による東京爆撃 東海地方に大地震	俳句雑誌の統廃合が相次ぐ
1945 年 (昭和 20 年)	岡山県に疎開。 その後美作に 33 年間在住	米軍の日本への爆撃が相次ぐ。東京大空襲 原爆投下。玉音放送、戦争終結	残存俳句雑誌もほぼ休刊 戦争終結後、復刊が相次ぐ
1946 年～1953 年 天皇人間宣言。日本国憲法施行 俳壇の戦犯追及問題、新俳句人連盟が西東三鬼の動議により分裂(新興俳句系が一斉に脱退) 現代俳句協会設立。「天狼」の根源俳句議論。「鶏頭論争」(子規) 新俳壇の形成・「戦後派」台頭・(草田男『銀河依然』跋文を契機とし)「社会性俳句」の勃興			
1954 年 (昭和 29 年)	『夕刊岡山』俳句欄選者を 担当	福龍丸ビキニ水爆被災事件 自衛隊発足 街頭テレビ普及	虚子が文化勲章受章 社会性議論が盛んに
1956 年 (昭和 31 年)	美作町婦人会俳句誌『女像』 編集	米国がビキニで初の水爆投下実験 経済白書「もはや戦後ではない」	金子兜太の「造形俳句論」
1957 年 (昭和 32 年)	『花実』参加。 『句壺抄』刊行	ソ連、スプートニク 1 号打ち上げ ポリオワクチン開発	久保田万太郎、文化勲章受章。 「造形俳句論」の議論が盛ん
1958 年 (昭和 33 年)	『俳句評論』参加	テレビ受信契約数 100 万突破 特急こだま号運転開始 東京タワー完成	関西の前衛俳句を中心に議論 が盛ん
1959 年 (昭和 34 年)	通訳を務めるうち、 聖書に親しみ受洗	伊勢湾台風 日本、国連理事国となる	前衛俳句、論・作ともに盛ん 虚子没
1960～1962 年 前衛派と伝統派の対立が鮮明となる。有季定型派は現代俳句協会を離脱、俳人協会設立 女性俳句懇話会結成(殿村菟絲子・加藤知世子・細見綾子ら)。国立国会図書館オープン 東京都の人口 1000 万人超え。			

1963 年	『瓶』創刊。『八幡船』参加。 牧師となる	輸入自由化 ケネディ米大統領暗殺	「俳句評論」組と「海程」組 の対立顕著
1966 年	『阿部青鞋集』刊行	航空事故多発 衆議院「黒い霧」解散	三橋敏雄『まぼろしの鱈』、蛇 笏『椿花集』、草田男『美田』 など刊行
1968 年	『火門集』刊行 『樹皮』刊行	三億円事件 川端康成、ノーベル文学賞受賞 文化庁設置	波郷『酒中花』、河原琵琶男『鳥 宙論』など刊行
1969 年	永田耕衣『真風』編集発行	アポロ 11 号、初の月面着陸 東大安田講堂の攻防戦放送	兜太の評論「社会性の行方」 をめぐり、論争始まる
1974 年	一行詩型研究誌『対流』参加		
1977 年	句集『続・火門集』刊行		
1978 年	美作から東村山の次女夫婦宅へ転居		
1979 年	句集『霞ヶ浦春秋』刊行		
1982 年	句集『火門私抄』刊行		
1983 年	句集『ひとりたま』刊行。第 30 回現代俳句協会賞		
1989 年	逝去。享年 74 歳		

## 阿部青鞋の俳句への考えまとめ（『ひとりたま』後記より）

### どう作りたいか

- ・「全て何でもあるものが、何でもなさそうな顔をしているそのおかしさを、私は私なりのありていな言葉で言  
ってみたい」
- ・「こっち側の小主観からする、わざとらしいフィクション」は「いずれ思考上の類想類形を競う」
- ・「常に分りのいい言葉で」書く

### 俳壇への気持ち

- ・「作品（もしくは人）と読者の真の関係」＝「笑いと愛の関係」
- 俳壇はずっとこうあってほしい

### 俳句とは何か

- ・**俳句形式**＝「そこに用いられるべき言葉が、他の場には決して置きかえのできない窮極状態に置かれて最も美  
しく生きるべき場」

＝「言葉に対する美的審問を、それ自体の中で発しそれ自体のなかで決裁することによって、他と紛  
れない独自性を明証する言葉の場」

だから、この明証性を敢えて欠くことが〈新しさ〉だとすると、俳句に近い短い表現は全て〈俳句っぽく〉なっ  
てしまう。しかし、「俳句は俳句に近い短さの全ての任意な表現とともに俳句である」とは思わない。俳句は詩で  
あるが、俳句以外の詩と無区分状態にあらうとするものではない。固有の形式があり、他とは対立する

→**俳句性**＝**明証性**ないし**対立性** 以外にはない

・〈俳句っぽい詩〉が俳句のような形式を持っているとしても、俳句ではないと成り立たないような整合・具体を示せないならば俳句ではない

・無季・有季は問わない

・定型そのものには特有な価値はない

・×「ある精神が十七字になるかならないか」 ○「ある精神を十七字にするかしないか」

・×「文学や詩で俳句をつくる」 ○「俳句で文学や詩をつくる」 ◎「文学や詩にならない文学や詩を創る」

・×「俳句の優位性は詩であること」 ◎「俳句の優位性は俳句であること」

→「私の俳句は散文の行い得ざることをやりたいと念ずるのみである。日々に命の灯を待み得ぬものが、何うして散文の後塵を拝するの十七字を弄ぶを得んや」(石田波郷『雨覆』後記より)

「俳句は、詩でも歌でもない。況して小説評論の後塵を拝すべきものでは断じてない。見方によってはいくらか偏執的と思はれる、この俳句形式の熱愛なきものゝ俳句変革は、単なる破壊に過ぎない、易々たることである。われわれは俳句形式を生かし、これに新しい生命を附与しなければならぬ」(石田波郷による前橋多弦『石垣』序文より)

## 一俳句空間一豈 weekly (2008 年 11 月 16 日) まとめ

・三橋敏雄、高柳重信、大岡信、加藤郁乎、折笠美秋、宗田安正、堀井春一郎、永田耕衣、などからは高い評価を得ている

・妹尾健太郎(※)が、平成6年(1994)に沖積舎から『俳句の魅力 阿部青鞋選集』を纏め、出版。現在では手に入りにくい。他の句集も絶版。

(※全集の年表作成協力者)

・20歳頃から本人によれば「実家へ戻って成人してから、正岡子規の俳論俳句を見、まねごとに作ったりもしたが、やがて関心は種々他へ移り、映画に凝ってエイゼンシュテイン、ブドウフキンに傾倒、またレスプリヌーボーを追って詩雑誌を編集」していた

・師系が存在しない。

・第一句集が『火門集』、第二句集が『続火門集』、第三句集が『ひとるたま』ということになっているが、他にも『壺』、『羽庵集』、『句壺抄』、『霞ヶ浦春秋』などといった句集が存在する。他に選句集として『私版・短詩型文学全書1 阿部青鞋集』、『火門私抄』がある。

・野田誠は青鞋のことを「俳句、短歌、作詞、作曲、漢文、英語、フランス語、ETC。その幅の広さ、その逞しさ」と評した。

## あたゝかに顔を撫ずればどくろあり

骸骨のうへを粧ふて花見かな／鬼貫

この作者は古俳諧の造詣も深く、その影響が作品に強く感じられる。特に鬼貫の作風を範としているようなところが多分にあるのでは。

手が顔を撫づれば鼻の冷たさよ／虚子

## かたつむり踏まれしのちは天の如し

我むかし踏みつぶしたる蝸牛かな／鬼貫

〈十句選〉以下、ページ数は全集のものである

冬の日を胸より外<sup>はづ</sup>し来て坐る 『武蔵野抄』 p.23

純粹に景として読むと、日向（胸に陽があたる位置）から動いて、日陰（胸には陽があたらない位置）に座った、と読める。しかし「外し来て坐る」の簡潔さが、まるで「冬の日」が接着可能なパーツであり、胸（心臓がある。急所）から外されたようにも読める。しかしそうすることで句の中の人物に何か悪影響があるわけでもなく、むしろ「坐る」の締め方は安寧を得ているかのようだ。

馬の目にたてがみとどく寒さかな 『句壺抄』 p.59

青鞋の句のなかではかなり俳句らしい句。「鬣が垂れて馬の目にかかっている」状態と「寒さ」を並べた構造だが、「とどく」が「寒さ」にやや掛かる。馬だけではなくそれを見ている（馬の目に映っているであろう）人物にも寒さが達しているように。

青うめの一度に二つ落ちにけり 『句壺抄』 p.67

一つ落ちて二つ落たる椿哉（正岡子規）を思い出す。

いつ迄も金魚の水をこぼす妻 『句壺抄』 p.80

美しく歳をとろうよ。たまになら水こぼしても怒らないから（千種創一『砂丘律』）をなんとなく思い出した。「いつ迄も金魚の水をこぼす」ことに怒るかどうかは不明だが、怒らないほうがよく、怒らないだろうと思う。

極楽の音がきこえるかなしさよ 『火門集』 p.99

「極楽」の音がきこえたらきっと嬉しかったり安心したりするだろうに、それが「かなしさ」をもたらす。この構造は

皆泣いてやさしきものは地獄かな 『火門集』 p.132

死ぬことが最も笑うことだろう 『樹皮』 p.180

に共通し、本来予想されるものとは違うものを提示する異化の句。

濃くなりし銀河のことを言ひそびれ 『続・火門集』 p.199

銀河も濃くなった事云ひて別る（井泉水の放哉への送別吟のうちの一句。大正 14 年）のオマージュ？ 尾崎放哉はこの一年後に死去するが、その事実を読み採用するとしたら、「言ひそびれ」することは必ずしも悪いことではない（世界線の分岐）。

パンの耳これはどこかの波打ち際 『続・火門集』 p.213

二物衝突と見立ての中間みたいな句。なんでもないことが海まで飛ぶのがいい。

冷蔵庫にハムあり春は慌ただし 『続・火門集』 p.245

ハムってなんだか明るいしめでたい。

大花火天を感じてのちこぼれ 『ひとるたま』 p.299

名句です。（→モノ主観俳句）

墮天使のごとき焚火をかこみけり 『ひとるたま』 p.316

墮天使のごときものをかこむのは結構怖いことだと思うが、囲めるほど人数がいるなら数の力でいけそう。

## モノ主観俳句（一部）

夏浪がおのれの丈にあきにけり	『句壺抄』 p.73
立つ波がわが夏帽をかぶりたき	〃
ふることになってからふるボタン雪	『火門集』 p.89
感動のけむりをあぐるトースター	p.95
死ぬつもりなどなき冬の蝶がとぶ	p.100
美しくならむと舌が思い居り	〃
蓮根は飛んでみたしと思いけり	p.118
虹自身時間はあると思ひけり	p.119
赤ん坊薔薇の花には似まいとする	p.125
水はただ拳のようなものが好き	p.130
生きているものがきらいな新聞紙	〃
つかれはてたる <sup>くびなが</sup> 首長の新聞紙	p.131
昼花火よごれんとして光るかな	〃
おろそかにくらせと空蟬に言はれ	『続・火門集』 p.221
白葱とわれとの思ひちがひかな	p.222
おなじ事を二本のレール思はざる	p.317
なんとなく嘘つきながら滝は落ち	p.320

## ・白

一生のしろいかもめが飛んでくる／阿部青鞋『火門集』（1960 年刊）

夜の湖ああ白い手に燐寸の火／西東三鬼（1900 年～1962 年）

しろきあききつねのおめんかぶれるこ／高篤三（1901～1945）

影はただ白い鹹湖の候鳥／富澤赤黄男（1902～1962）

波のりの白き疲れによこたはる／篠原鳳作（1906～1936）

頭の中で白い夏野となつてゐる／高屋窓秋（1910～1999）

あまりにも石白ければ石を切る／渡辺白泉（1913～1969）

しろい昼しろい手紙がこつんと来ぬ／藤木清子（生年没年不明。1940 年を最後に句の発表を止める）

夕焼の中来て白き掌をひらく／小宮山遠『喪服』（1969 年刊）

「白という色彩は新興俳句にとっては象徴的な色彩でした」（一俳句空間一豈 weekly（2008 年 11 月 1 日）より）

1933 年新興俳句は全国に伝播（年表参照）

掘り下げられなかったこと

- ・怖い句（キャツキャツと鋏と思うものが鳴く 『阿部青鞋集抄』p.84、蟻の穴の中から人の声がする p.85 等）
- ・戦争との距離（プロレタリア俳句、銃後俳句との関係）
- ・師系がない
- ・川柳のことをどう思っていたか